

## 九州の言語聴覚士の研鑽と交流の場の歴史と鹿児島での開催について —日本言語聴覚士協会九州地区学術集会のはなし—

一般社団法人 鹿児島県言語聴覚士会 会長 | 原口 友子

令和5年も季節はめぐり、ハナミズキの葉が真っ赤に色づくとともに、フキの黄色い花が咲き、次第に燃えるような赤色になったモミジや黄色く色づいたイチョウが散る頃になってきました。そして、今年もこの鹿児島市医師会報・新春号の寄稿文を執筆する季節となりました。

今年は3年余り続いたコロナ禍が、2類から5類に変わった5月以降、世間一般的にはいっきに開放的な雰囲気が広がり、医療・介護業界でもまだまだ一般の方と同じようにはいきませんが、対面の学会や講演会、会議なども開催されるようになりました。また、県外への移動に対する制約もなくなり、医療現場での一時期のピリピリとした空気感も和らいできたように感じます。

私たち九州の言語聴覚士が長年続けてきた九州地区の「九州地区学術集会」もこの3年間、中止もしくはオンラインでの開催を余儀なくされました。しかし、令和5年度は、開催県である大分県が対面オンリーの開催を決定し、年明けの開催に向け準備を進めています。この集会は、正式名称を日本言語聴覚士協会九州地区学術集会といい、今回の大分大会は当該大会が開始されて12回目を数えます。九州地区でこのように8県もの多くの県の言語聴覚士が一堂に集い、言語聴覚士の質の向上に努める場は日本において随一であると思っています。この会の歴史を少しひも解いてみると、この学術集会の第1回の開催は、2011年10月の長崎大会でした。毎年、九州8県の言語聴覚士会が持ち回りで運営を行っています。今回の大会は「第12回」と

銘打っていますが、九州でこのような研鑽の場が運営され始めたのは12年前ではなく、その歴史は1987年に開催された「第1回九州言語臨床研究会」にさかのぼります。今から37年前になります。1991年開催の第5回九州言語臨床研究会大分大会の参加者は62名でした。この頃、この研究会は、ほぼ全員が同じ宿舎に泊まり込み、昼間は演題発表や講演で研鑽し、夜は酒を酌み交わしながらアカデミックな議論だけでなく日頃の悩み、将来について年齢や所属の境なく熱く語り明かすのが常でした。その頃、まだ国家資格はなく、国家資格としての身分の保障はなくとも、ST（当時は言語療法士と呼ばれることが多かった）それぞれが、自身が出会った患者に最高の結果をもたらす言語（聴覚）療法を提供するためにSTとしての研鑽に努めていました。令和5年度は大分県の当番ですが、令和6年度は、私たち鹿児島県での開催が決定しています。令和6年度・令和7年3月28・29日にかごしま県民交流センターで「日本言語聴覚士協会九州地区学術集会」を開催します。顔の見える交流を目指し、開催方法は対面のみとしています。すでに実行委員会を立ち上げ、鋭意、準備に取り組んでいます。

このような集いが不安なく開催される平和と、読者の皆様、そして皆様に支えられている方々にとって幸多き一年となりますことをお祈り申し上げます。